最大共通要素をたてる見方に抗うということ

—マクダウェルの選言説の解明と評価—

小 川 祐 輔*

Resisting the Highest Common Factor Conception: An Exposition and Evaluation of McDowell's Disjunctivism

Yusuke OGAWA*

Abstract

This paper discusses John McDowell's disjunctivism. Through the Argument from Illusion, many philosophers have accepted that subjectively indistinguishable perceptual experiences share an underlying mental state (a highest common factor). McDowell, by contrast, thinks of this conception of experience as problematic, developing disjunctivism, which claims that a veridical experience and a corresponding delusive one need not be taken as having a common state—even if they are indistinguishable from one another. However, his writings are difficult to read, so that his thought on disjunctivism, it seems, is still not properly understood or evaluated. Given that the validity of disjunctivism is an important topic in the philosophy of perception, and given that McDowell is one of the standard-bearers of the position, such a situation would be quite unsatisfactory. Therefore, in this paper I work on two things: namely, I try first to give an interpretation of his relevant thought, and then to reveal its significance.

私たちは、錯覚しているときや幻覚に陥っているときなどにそれと気づかないことがある。この事実はしばしば、〈真正な (veridical) 知覚は人を欺く (delusive) 知覚から識別不可能 (indistinguishable) でありうる〉と表現され、さらにそこに簡単な考察を加えることで、〈真正な知覚の場面であれ、それと識別不可能な人を欺く知覚の場面であれ、そこで私たちに生じている知覚経験は両者の最大共通要素 (highest common factor) である〉といったテーゼが導出されてきた (「最大共通要素」という用語は McDowell 1982 による)。

だが、こうした共通要素を問題含みなものとする

哲学者もいる。そしてそのなかの一人が J. マクダウェルだ。彼は、識別不可能性を根拠に知覚経験を一括りにする上述の推論——広く錯覚論法と呼ばれている——にたいして、経験を選言的に理解する選言説 (disjunctivism) を展開することにより、この推論を退けようとするのである。

私としては、以上のようなマクダウェルのとり組みは大いに注目されるべきものだと考えている。しかし彼の著作は (その著述スタイルも相まって) 難解であり、錯覚論法や選言説にまつわる彼の思索の全体像を把握することさえ容易ではない¹。そこで本稿では、彼

* 筑波大学大学院

E-mail: yogawa6383@gmail.com

本稿執筆にあたっては、次の方々からの批判や助言に大いに助けられた。小草泰、源河亨、新川拓哉、藤川直也、山田圭一、ウィリアム・フィッシュの各氏、および二名の匿名の査読者である。記して感謝の意を表したい。

¹ T. ソーントンの次の一節は、マクダウェルの思索や文章が難解である理由を見事に言い当てているように思われる。「第一に、彼の哲学は [……] 個々別々の哲学論文をとおして広がっている。第二に、彼の散文は凝縮されており難解である。論文には小見出しがなく、議論の方向性がはっきり示されることもなければ要約がなされることもない。繰り返しや余剰は最小限に抑え

の問題意識を明らかにしたうえで、彼の選言説がもつ意義について論じてみたい。

本稿の構成は以下のとおり。まず1節では、錯覚論法の構造を確認した後、その帰結にたいしてマクダウェルが抱く懸念にもごく簡単にふれておく。次に2節では、彼の選言説がいかにして錯覚論法を退けるのかを説明する。そして3節では、彼が錯覚論法に関連づけている問題に解明を与える。それをふまえて4節では、彼の選言説がどのような知覚観に行き着くものなのかについて論じる。最後に5節では、彼の選言説に洞察が含まれていることを示すため、共通要素の存在を積極的に認める立場である志向説 (intentionalism) との比較検討を行う。

1. 錯覚論法と最大共通要素

私たちは日々、知覚によって外界のあり方にアクセスしている。視知覚を例にとってみるなら、私たちは、自分の周囲にどのような事物があるのか、そしてそれがどんな性質をもっているのかをこの能力によって見てとっている²。

しかし、こうした知覚的アクセスがいつもうまくいくとはかぎらない。たとえばミュラー＝リヤーの錯視図形を見る場合、物理的には同じ長さであるはずの二本の線分が違った長さに見える。また、幻覚の場面ではそこにまったく存在しないものさえ見えてしまう。錯覚論法はこのような事実注目し、知覚を真正なものと人を欺くものという具合に二分する。つまり、くたしかに真正な知覚の場面で生じている知覚経験は外界のあり方に届いているかもしれないが、人を欺く知覚の場面ではそうではないとするのである。

とはいえ、ここまでだと両者の共通要素と呼ぶべきものはまだ見出されていない。そして錯覚論法は識別不可能性を武器にもう一步先に進む。この点については H. H. プライスの示唆的な一節を引用しよう。

質的な面のすべてにかんして非常によく似た二つのものが実際にはまったく別物だ、などというの

は——つまり、一方は観察者の心や身体から独立した物的対象の実際の構成要素なのだが、他方は観察者の脳内過程による泡沫の産物にすぎない、などというのは——信じがたいことではないのだろうか (Price 1932, pp. 31–32, 強調は引用者)。

本稿冒頭でも述べたように、私たちはしばしば真正な知覚と人を欺く知覚を識別しそこなうことがあるが、錯覚論法によれば、それは両者の場面で生じている知覚経験がまったく同じものであることの証拠なのだという。そうでなければ、両者が識別不可能なほどよく似ているということに説明がつかないだろう、というわけである。

以上のことをすべて認めるなら、たしかに、知覚経験を真正な知覚と人を欺く知覚とのあいだの最大共通要素とみなすのはもっともである。そしてもし経験がこのように共通要素なのだとなれば、それは真正な知覚の場面でさえ外界のあり方に届いていないことになるだろう。後の議論のため、以上の推論をより図式的に表しておくなら、それは以下の5つのステップにまとめることができる。

- (1) 知覚は真正なものと人を欺くものとの二種類に分けられる。そして後者の場合、そこで主体に生じている知覚経験は外界のあり方に届いていない。
- (2) 真正な知覚は人を欺く知覚から識別不可能でありうる。
- (3) 両者が識別不可能でありうるということは、そうした識別不可能性を説明する共通の要素が両者のあいだにあるはずだ。
- (4) 真正な知覚の場面であれ、それと識別不可能な人を欺く知覚の場面であれ、そこで私たちに生じている知覚経験は両者の最大共通要素である。
- (5) 私たちに生じる知覚経験は、真正な知覚の場面でさえ外界のあり方に届いていない。

さて、ひとたびこの結論 (5) に到達したなら、マクダウェルが言うように、私たちは知覚経験全般を「経験主体と事実それ自体のあいだに差し挟まれたもの」(McDowell 1982, p. 386) として描くことになるだろう。このように錯覚論法は、私たちは知覚的に欺かれる可能性があるという事実や、人を欺く知覚が真正な知覚から識別不可能でありうるという事実簡単な考察を加えることで、私たちの外界へのアクセスを問題含みなものにしてしまう。まさにここにおいて、「世界へ

られている。こうしたことがある種の混ざりを生み出しているのだが、それが読者にとっては難解さのもとにもなりうるのである」(Thornton 2004, p. 4, 中括弧は引用者)。

² このように、本稿では知覚ということで視知覚のみを扱うこととする。視知覚についての考察こそ、錯覚論法がもっとも説得的に感じられる文脈である。

と直接的に開かれていること (direct openness to the world) という考えが掘り崩され、その結果として、「外的」実在についての知識全般にたいする伝統的な問題がもたらされるのである」(McDowell 1982, p. 393)。

2. 選言説はいかにして錯覚論法を退けるのか

では、こうした錯覚論法に対抗するマクダウェルの選言説とは一体どのようなものなのだろうか。以下ではしばらくこの問題に取り組んでいくが、本節ではまず、彼の選言説がいかにして錯覚論法を退けるのかを説明しておきたい。さっそく関連する箇所を引用しよう。

まったく不自然なことではないのだが、次のように言うとしてみよう。つまり、しかじかのことが成立しているという現れ (appearance) は、たんなる現れか、あるいはしかじかのことが成立しているという事実が主体に知覚的に顕わになった (manifest) ものかのいずれかでありうるのだ、と。[知覚経験を共通要素とみなす場合] と同様、人を欺く場合の経験の対象はたんなる現れである。しかし私たちは、人を欺かない場合の経験の対象もまたたんなる現れであり、それゆえ当の事実それ自体には届かないものだ、ということを受け入れるべきではないのである (ibid., pp. 386–387, 強調は原著者、中括弧は引用者)。

錯覚論法を退けようとするマクダウェルも、知覚の可謬性や知覚間の識別不可能性を完全に否定するわけではない。つまり、先に定式化した錯覚論法の五つのステップに照らして言えば、彼はそのうちの (1) と (2) までは受け入れる。

しかしそのうえでマクダウェルは、知覚経験をあくまでも選言的に理解することで、共通要素を導入する (3) 以降を否定しようとする。たとえ知覚が真正なものか否かを主体が識別できない場合があるとしても、依然としてそこで生じている経験は、外界のあり方に届いているか否かのいずれかであるものとして理解できる。それゆえ、識別不可能性を指摘しただけでは、後者の場合を一般化して共通要素をたてる根拠として十分ではない、というわけだ。ちょうど錯覚論法のステップ (3) は、識別不可能性を説明するためのアブダクションというかたちをとっていたが、それにたいしてマクダウェルは、「識別不可能性は選言的であることを本質とする見方に容易に順応する」(ibid., p. 389) —— 異な

る本性をもつ二つの経験が相互に識別不可能であったとしても、なんら不思議ではない——として、そうした説明にストップをかけるのである。

きわめてシンプルではあるが、彼が錯覚論法を退けるために言うことはこれに尽きる。つまり彼の選言説は、経験を共通要素とみなすことはできないと積極的に言いたてようとするものではなく、そうした見方を受け入れなくともよい理由を与えようとするものである。本節の最後に、この点がもっともよく表れている箇所を引用しておこう。

[錯覚論法に] 抵抗するには、開かれていることというイメージが伝える立場、すなわち事実を直接に掴むという考えを理解できさえすればよい。[……] もしこの考えが理解可能であるなら、[錯覚論法] からは私たちが困惑させるために不可欠な切迫感が失われる。その切迫感は、[錯覚論法] が意気消沈させる事実——主体の認知的身分がどれほどよいものであっても、事態がその主体に直接に顕わになるなどということはいえ、というもの——を際立たせているようにみえることに由来するのだが、そんな事実は存在しないのである (McDowell 1994, p. 113 [邦訳: p. 187] 強調は原著者、中括弧は引用者)。

錯覚論法を受け入れることは避けられないという見かけをとり除き、外界のあり方に届いた経験という考えの理解可能性を確保すること——やや繰り返しになるが、これがマクダウェルの選言説の根底にあるモチーフである。

3. 錯覚論法がもたらす問題

とはいえ、以上はあくまでも概観にすぎない。選言説はそうした考えを否定すると言うが、知覚経験が最大共通要素だというのは具体的にどういうことなのだろうか。あるいは、知覚経験を選言的に理解するというのは、真正な知覚の場面で生じる経験 (真正な経験と呼ぼう) と人を欺く知覚の場面で生じる経験 (人を欺く経験と呼ぼう) とのあいだに、具体的にどのような違いを設けることなのだろうか。これらの点にかんしては選言説論者も一枚岩ではないうえに、マクダウェル解釈についても意見の割れが見られるなど、事情は少々複雑である。そこで以下の二節では、1 節で簡単にしか述べなかったマクダウェルの問題意識について

掘り下げつつ（本節）、彼の選言説がどういった性格のものなのか、そしてそれがどのように問題への対処に資するのかを明らかにしていきたい（次節）³。

3.1 錯覚論法と認識論的な問題

マクダウェルが錯覚論法に見てとる困難が外界へのアクセスにまつわるものであることはすでに確認したが、こうしたところに関心を向けたときにまず出てくるのは、知覚的な知識の可能性をめぐる認識論的な問題だろう。実際、マクダウェル自身も認識論には並々ならぬ関心を寄せており、彼が選言説を初めて明示的にうち出した McDowell 1982 では、（1 節の最後に引用した箇所にも「知識」という言葉が見られたように、）錯覚論法がもたらす認識論的な問題が主題的に検討されているのである。

では、マクダウェルは錯覚論法がいかんして認識論的な問題をもたらすと考えているのだろうか。この点にかんしては次の一節を見てみるのがいいだろう。

〔錯覚論法を受け入れるなら、〕私たちは、この能力〔外界のあり方を知覚経験に基づいて捉える能力〕が実際に知識をもたらすときでさえ、そうした基盤〔となる経験〕を、人を欺く場面であれそうでない場面であれ同様に利用可能な最大共通要素とみなさねばならない。そしてそれゆえ私たちは、そうした基盤を、〔……〕その知識にとってはせいぜい阻却可能な（defeasible）根拠にしかならないようなものとみなさねばならないのである（ibid., p. 386, 強調は原著者、中括弧は引用者）。

私は今自分の目の前にディスプレイがあると信じているが、この信念が知識であるためには、それが（当てずっぽうのような）認識論的に不適切な手続きで形成されたものでない——ちゃんと正当化されている——のはもちろん、実際に私の目の前にディスプレイがあるのでなければならぬ。一般的に、信念が真であること（信じられている事柄が事実であること）はそれが知識であるための必要条件なのであり、この意味で、知識は事実含意的な（factive）性格をもつのである。

しかし錯覚論法を受け入れるなら、知覚経験に照らして信念の真理性を確保する可能性は閉ざされてしま

うように思われる。経験を真正な知覚と人を欺く知覚のあいだの共通要素とみなす以上、それは主体の内的状態（典型的には脳状態）のみにスーパーヴィーンするようなものと解されねばならない。だがそうすると、経験が主体に付与する根拠は、関連する事態の成否にかんして中立なもの——自分にはしかじかのことが成立しているように見えている（seem）、といった程度のも——でしかありえないことになるだろう。こうした脆弱な根拠こそ、マクダウェルが上の一節で「阻却可能な根拠」と呼び、問題視しているものに他ならない。この種の根拠は、その非事実含意的な性格のため、さらなる発見によって阻却される可能性に永遠に晒され続けるのである。

かくして錯覚論法は、知覚的な知識の可能性にたいして深刻な疑念を突きつけることになる。知覚経験は私たちが知覚信念のための根拠を得る唯一の経路であるにもかかわらず、共通要素としての経験は私たちに阻却可能な根拠しか与えてくれない。信念が知識であるためにはその真理性を確保できねばならないのに、錯覚論法のもとでは、そうした真理性はすべて意識的なアクセスの射程外に追いやられてしまうのである。

3.2 認識論的な問題から超越論的な問題へ

ところで、錯覚論法がもたらす影響を以上のように表現するかぎり、この推論が脅かすのはあくまでも知覚的な知識の可能性のみである。しかしマクダウェルは、こうした認識論的な問題について、「それは「最大共通要素」をたてる見方の不具合を捉えるさいのファーストパスでしかない」（McDowell 2013b, p. 271）とも述べている。そう言うさいに彼が念頭に置いているのは超越論的な問題だ。つまり彼は、知覚経験を共通要素として主体内部に位置づけるなら、ただそれを知識の源泉とすることができなくなるだけではなく、そもそもそれを外界のあり方についてのものとして——すなわち、志向性（intentionality）をもつものとして——理解することさえできなくなる、と考えるのである。

そうした問題意識が明確に表明されているのは、たとえば次の一節だろう。そこで彼は、共通要素をたてる見方を「デカルト的な描像」と呼びつつ、次のように述べている。

完全にデカルト的な描像によれば、不可謬な仕方
で知りうる事実〔自分にはしかじかのことが成立

³ これら二節では、もっぱらマクダウェル（ないし、好意的な姿勢で彼を解釈しようとしている私）の観点から論を展開していく。そこで議論の正当性については 5 節で改めて検討する。

しているように見えている、という事実]を選言的に理解することが究極的には必要不可欠であることなどありえない。そうした事実は内的領域における自立的な地形なのであり、その本来の特徴は徹頭徹尾、(無害な立場[選言説]からすれば)選言肢間の差異によって記されるものに言及することなく知りうるのである[……。するとこのとき、完全にデカルト的な描像が(そもそも)内的事実を内容の伴う(content involving)用語で——つまり、自分にはしかじかのことが成立しているように見えているといった観点から——特徴づける資格を有するかどうか、きわめて疑わしくなってくる(McDowell 1986, pp. 242–243, 中括弧は引用者)。

途中に「内容」という言葉が出てくるが、これは心的状態がもつ、その志向性を特徴づける要素のことである。たとえば私が今まさに有しているディスプレイの経験の場合、その内容は、今自分の目の前にディスプレイがあるように見えているといったものであり、この経験がディスプレイについてのものであることを担保している。そしてマクダウェルによれば、デカルト的な描像のもとでは、知覚経験にこうした内容を認めることができなくなってしまうという。これは明らかに、知覚的な根拠の脆弱性のみが焦点であった——言いかえるなら、そうした根拠が外界のあり方についてのものであることは終始自明視されていた——認識論的な問題よりも、さらに一段根本的な問題である。

とはいえ、デカルト的な描像がそうした問題をもたらす理由については、上で言われている以上の説明が必要だろう。にもかかわらず、この点にかんしてマクダウェルの論述は明晰さを欠いており、彼の真意を読みとるのは容易ではない。まさに篠原成彦が指摘するように、問題の理由が「ちゃんと説明されていない」(篠原 1995, p. 347)のだ⁴。そこで以下では、彼の超越論的な問題意識が理解可能なものとなるよう、私なりに一つの議論を再構成してみたい。

さて、引き続き私のディスプレイの経験を例にとってみよう。私はもちろん、この知覚経験をディスプレイについてのものとして受けとっている。そしてこれは、私がこの経験を、自分の目の前にディスプレイがある場合、かつその場合にすぎず真正であるようなものとして理解している、ということでもある。このように、知覚経験が志向性をもつためには、経験は、その真正性条件として特定の外界のあり方を選び出せるのでなければならない。真正性が規範性的一种であることに鑑みるなら、「心的な状態やエピソードが[……]世界に向けられているという考えを理解するためには、そうした状態やエピソードを規範的な文脈に置く必要がある」(McDowell 1994, p. xi [邦訳: p. 2] 中括弧は引用者)と言えるのである⁵。

しかし、目下問題視されている考え方のもとでは、こうした理解は成立しえないように思われる。この考え方を受け入れるなら、私の目の前にディスプレイがある場面でも、私の目の前にあるのが精巧なディスプレイの騙し絵であったり、それらしい事物がなにもないところに鮮明なディスプレイの幻覚が見えているだけだったりする場面などでも、私には「徹頭徹尾同じ」知覚経験が生じているのだと考えねばならない。だがそうだとすると、そうした諸々の場面のうち、どれをこの経験の真正性条件とみなせばいいのだろうか。もちろん私としては、自分の目の前にディスプレイがある場面を推したい。けれども困ったことに、いまやこの経験は特定の場面と本質的な結びつきを有していないわけなので、考えられる他の候補——たとえば、私の目の前に騙し絵がある場面やそれらしい事物がなにもない場面、あるいは、〈私の目の前にディスプレイがあるか、騙し絵があるか、なにもないかのいずれかであるような場面〉といった選言的なもの——を抑えて私の選好を特権化する理由はどこにも見当たらないのだ。明らかに、こうした状況においては、この経験が真正なのか否かを外界のあり方に照らして問うことな

⁴ 篠原と同様の不満を表明しているものとして、小草 2009 も参照。あるいはこの点に関連するものとして、次の事実を指摘することもできるだろう。それは、マクダウェルの選言説が認識論の文脈で大きな注目を集めている一方で(e.g. Pritchard 2012; Soteriou 2016)、その超越論的な意義が問題にされることはほとんどない、というものだ。私には、この事実もまた、彼の超越論的な問題意識が明瞭に表現されていないことの表れであるように思われる。

⁵ この発言自体は知覚経験ではなく判断や信念に向けられたものののだが、マクダウェルはそのすぐ後で、「もし判断や信念をこのような仕方では世界に向けられているものとして理解できるなら、その他の種類の内容を伴う態度や姿勢についても、容易に適切な理解が得られるはずである」(McDowell 1994, p. xii [邦訳: p. 2] 中括弧は引用者)と述べている。彼が知覚経験の志向性を内容の観点から理解していることを思い出すなら、彼は同じ論点を知覚経験にも適用するつもりがあるのだと考えるのが自然だろう。

ど意味をなさない。まさにこのとき、私の経験は、規範的な文脈から外れた「内的領域における自立的な地形」になっているのである⁶。

このように、知覚経験を共通要素として外界のあり方から切り離すなら、経験は真正性条件をもつという考えが維持できなくなる。そしてそれは、上で関連づけたように、経験から志向性が失われるということに他ならない。私の意識には依然として様々な光景が現れてくるのだが、これらはすべて、私に真実を語ることはもちろん、私を欺くことさえない。かくしてデカルト的な描像は、「どうやら私たちの描像は、私たちを世界にまったく触れていないものとして描いているようだ」(McDowell 1986, p. 242) という「世界喪失」(ibid. p. 238) の感覚を喚起するのである。

4. 選言説の正体と問題の解消

前節の議論で示されたように、マクダウェルが錯覚論法に見てとる二つの問題の根底には、知覚経験を一様に外界から切り離して主体内部に位置づけようとする考えがある。これが彼の問題視する共通要素をたてる見方である。

こうした事情を背景にするなら、マクダウェルが選言説によって守ろうとしている「世界へと直接的に開かれていること」というイメージの内実も、おのずと明らかになってくるだろう。つまり彼は、以上のような考えに抗し、(少なくとも) 真正な知覚経験は外界のあり方を構成要素として含んでいる——それゆえ、主体に真正な経験が生じている場面では、外界のあり方それ自体が主体の意識に現前している——という素朴実在論的な知覚観を手元にとどめておこうとしているのである⁷。このことを裏づける発言は彼の著作のなかに豊富に見出せるが、ここでは彼が一貫してこの種の選言説を展開してきたことを示すべく、最初期のもの

と最近のものとを並置しよう。

[錯覚論法が言うのとは] 反対に、[知覚経験が真正なものである] 場合に主体に現前している現れは、事実それ自体が経験主体に顕わになったものである (McDowell 1982, p. 387, 中括弧は引用者)。

客観的実在の一側面が主体に知覚的に現前しているということからは、主体はしかじかのことが成立しているという現れをもっているということが帰結する。これは私が提唱している経験についての選言的な見方の主張の一部である。しかしそれは、客観的実在の一側面が主体に知覚的に現前しているということ、なんらかの心的でない (non-mental) 条件と、そうした条件から独立に一つの心的状態とみなされる現れとに分解できる、ということではない。この種の分解は失敗する。問題の状態が現れなのは、それが主体になにかが知覚的に現前している状態だからこそなのである (McDowell 2010, p. 251)。

二つ目の引用については少し説明しておくべきだろう。ここでマクダウェルが問題にしているのは、真正な知覚経験——あるいは彼が言う「客観的実在の一側面が主体に知覚的に現前している」ような経験——の構造を、く自立的な内的経験+その経験を真正なものたらしめる外的要因」といった仕方で、二つの相互に独立した項からなるものとして分析できるのかということだ。そして彼は、選言説の名のもとに、こうした分析に強く反対している。この点をふまえるなら、上の二つの引用のいずれから、真正な経験と外界のあり方とは構成上不可分だという彼の主張が読みとれるはずである⁸。

⁶ この段落の論述は、L. ウィトゲンシュタインの規則遵守論 (Wittgenstein 1953) や、それを S. クリプキが解釈・再構成したもの (Kripke 1982)、そして J. フォーダーの選言問題 (Fodor 1987) を下敷きにしている。超越論的な問題と規則遵守論との関連性については、マクダウェル自身が(ごくわずかにではあるが) 言及しており (McDowell 1986)、そうした彼のウィトゲンシュタイン的な問題意識を選言問題に接続するという手法については、Thornton 2004 から大きな示唆を得た。

⁷ こうした種類の選言説は、知覚経験の形而上学的な本性に関心を払っているという意味で、形而上学的選言説とも呼ばれている (cf. Fish 2010)。

⁸ 前節冒頭で述べたことから予想されるとおり、マクダウェルにこの種の形而上学的選言説へのコミットメントを帰属させることにたいしては、反対意見やその一貫性を疑問視する声もある。前者の例としては Snowdon 2005 や Byrne and Logue 2008 を、そして後者の例としては Haddock and Macpherson 2008b を参照。

これらの先行論に共通するのは、マクダウェルの認識論的な問題意識に着目し、そうした問題意識に対処するためであれば形而上学的選言説は必要ないのではないか、と論じている点だ。それにたいして本節の(ないし前節から続く一連の) 議論は、次の二つの点でそうした解釈から距離を置くものになっている。すなわち、(1) マクダウェルの認識論的な問題意識でさえ、知覚経験の形而上学的な本性の問題と関連づけようとしていること、そして (2) 超越論的な問題意識にも着目し、

では、以上のような選言説（これ以降、選言説と言う場合にはもっぱらこの種のものを指すこととする）は、先の二つの問題に対処するうえでどのように効いてくるのだろうか。そもそも問題をもたらす考え方とは大きく異なっている、というのはそのとおりなのだが、ここではもう少し踏みこんで、選言説が問題の発生を抑える仕組みを確認しておきたい。

マクダウェルが考える問題間の優先順位には反することになるが、本稿の構成に沿って認識論的な問題から見ていこう。といっても、この問題にたいする選言説の寄与については、彼自身がすでに要を得た説明を与えてくれている。

〔客観的实在の諸側面を主体に現前させること〕という観点から記述可能な経験をもつというのは、物事は経験が明らかにしているとおりでと信じるための阻却不可能な保証を得るということである。客観的实在の一側面が主体に知覚的に現前しているなら、物事は経験が明らかにしている〔……〕とおりでと信じることに於いて、主体になにかしらの欠陥が残る可能性はない。この可能性は、そこで主体に生じている経験の本性と両立しないのである (ibid., p. 245, 中括弧は引用者)。

私の意識にディスプレイが現前している場合、現前という事柄の本性からして、そこにディスプレイがない可能性は排除されている。するとこのとき、この知覚経験から私が得る根拠は、いま自分の目の前にはディスプレイがあるという私の信念の真理性を確立しきるほど堅固なもの——今自分は目の前にディスプレイを見ている (see)、といったもの——だということになるだろう（これがマクダウェルの言う阻却不可能な根拠である）。かくして選言説は、知覚的な知識の可能性を確保する。真正な経験を対象の現前として理解できるようになることで、経験が知覚信念の真理性を裏づけるということ（私たちはときに知覚的に欺かれるということ以上の）特別な困難を見てとる必要がなくなるのである⁹。

その解消には形而上学的選言説が有効だと論じようとしていることである。

⁹ 何人かの論者はこの点に疑念を向けてきた。仮に真正な知覚経験を対象の現前という観点から理解するとしても、主体が知覚的に欺かれる可能性が完全に排除されるわけではない（2節で見たように、このことはマクダウェル自身も認めている）。しかしそうだとすると、選言説のもとでも、主体が知覚経験から得られる根拠は依

もう一つの超越論的な問題についてはどうだろうか。共通要素としての知覚経験に志向性を認められないのは、（私の解釈では）その真正性条件を一意に定めることができないからだ。だが選言説をとるなら、もはやこうした状況に思い悩む必要はなくなるだろう。この立場によれば、私が経験するディスプレイの見えには、ディスプレイを構成要素に含んでいる（ディスプレイが私に現前している）場合と、そうでない場合とがある。すると私はこの経験を、前者の場合にのみ真正であるようなものとして——それゆえ、ディスプレイについてのものとして——問題なく受けとることができる。知覚経験と外界のあり方との本質的な結びつきを確保しておく選言説のもとでは、経験はあくまでも外界への正しいアクセスであるか否かのいずれかなのであり、こうした理解を脅かすものなどないものである。ここでもマクダウェル自身の言葉を引用

然として阻却可能なものとどまるのではないか——というわけである (e.g. Wright 2002; De Gaynesford 2004)。

この疑念は非常に重要であり、本稿で十分に扱えるものではないのだが、マクダウェルにならい、それが議論の余地のある考えに基づくものだという点是指摘しておきたい。その考えとは、〈主体が阻却不可能な根拠を知覚経験から得るためには、経験が主体に付与する根拠がその種のものであるということと、不可謬な仕方と把握できるのでなければならない〉というものである (McDowell 2013a)。あるいはもう少し率直に表現するなら、知覚的証拠についての内観的な全知なしには、選言説は認識論的な恩恵をもたらすことはできない、と想定されているのである。

しかしながら、主体が知覚経験から阻却不可能な証拠を得るために、本当にそうした全知が必要なのだろうか。ここでさらに注目すべきは、上述の疑念が、ある能力（目下問題になっているのは、真正な経験から阻却不可能な証拠を得る能力である）を適切に行使しそなう可能性からその能力の不在ないし利用不可能性を導く推論のかたちをとっているということだ。だがこの推論は、それ自体としては非常に疑わしい。たとえばフリースローを十分に高い確率で成功させる（つまりたまには失敗する）バスケットボール選手には、フリースローを決める能力がないのだろうか。もちろんそんなことはない (McDowell 2010, 2013b)。それゆえ、問題の推論を受け入れるもっともな理由が与えられないかぎり、主体が知覚的に欺かれる可能性を認めているというだけでマクダウェルの失敗を結論づけるのは早計だと言べきだろう。（そして彼にたいするさらなる反論を展開しようとしている論者は、彼の選言説が、ある能力を適切に行使しそなう事例について真であることを、その能力を成功裡に行使する事例にまで拡張して当てはめようとする推論——ちょうど錯覚論法に見られる類の推論——にたいする強力なカウンターであることにも留意せねばならない。）

しておこう。

〔選言説が与える〕説明によれば、しかじかのことが成立していることという観念は、不可謬な仕方では知りうる現れ〔自分にはしかじかのことが成立しているように見えている、というもの〕についての私たちの理解に直接的に関与している。それゆえ、どうして経験が外的實在にたいする表象的志向性 (representational directedness) をもつものとして理解されうるのかにかんする問題など、ここにはいっさい存在しないのである (McDowell 1986, p. 242)。

けっして分かりやすい一節ではないが、ポイントは、「しかじかのことが成立していることという観念」を真正性条件のことで解することである。知覚的な見えを(上で説明したような仕方)でその真正性条件と結びつけて理解することができるなら、志向性が真正性条件によって与えられるものである以上、その見えがなにについてのものなのかにかんして厄介な問題が生じる余地はない——これがマクダウェルの主張であると考えられる。

おおむね以上のような理由により、二つの問題は解消される。選言説は、錯覚論法の受け入れを拒否する理由を与えることで、外界へのアクセスにまつわる哲学的な困難を「錯覚として暴く」(McDowell 1994, p. xi [邦訳: p. 2]) ののである¹⁰。

¹⁰ マクダウェルの選言説についてひととおり解説し終えたところで、査読者の一名からの提案をうけ、彼が展開しているもう一つの知覚の哲学上の立場である概念説 (conceptualism) にもごく簡単に、そして独断的な論述になることを恐れず——というのは、概念説にかんする彼の議論は選言説のそれに劣らず難解なのだ——ふれておきたい。概念説とは、一言で言えば、〈私たち理性的動物が知覚経験をもち場合、その内容は、私たちの概念能力によってその形式を与えられている〉とする立場である。そして私が理解するかぎり、この立場が選言説にたいしてもつ意味はきわめて大きい。というのは、マクダウェルの選言説は、概念説を抜きにしては、私が述べてきたようなものにはなりえないと考えられるからである。

さて、マクダウェルが概念説に課す役割は、知覚的な対象認識の説明である——こう言っただけでかまわないように思われる。たとえば彼は、自身が概念説を否定する論者に帰す所与の神話 (the Myth of the Given) について、次のように述べている。〔所与の神話にたいする彼の〕警告のポイントはまさに、私たちの対象にたいする感性がどのような形式を有しているかが問題になる、ということなのだ。所与の神話を避けること

は、〔……〕対象にたいする私たちの知覚的な感性が、それらの対象を私たちが〔経験的思考のような、経験に後続する認知的活動において〕概念のもとに包摂できるようにする、ということが理解可能であるための条件なのである」(McDowell 2018, p. 25, 中括弧は引用者)。直観的には、私たちの経験は、私たちが外界の対象へと気づかせ、そしてそれらを認知的に利用可能にするものであるように思われる。しかしマクダウェルの考えでは、概念説をとらなければ、そうした直観を正当に扱うことができないのである。

マクダウェルの関連する問題意識について、もう少し具体的な説明を試みよう。ここでカギとなるのが、対象をそういうものとして見るとき、私たちはそれらを特定のあり方をしたものと見て、あるいは特定の性質を備えたものとして見る、という事実である。たとえば、ある主体の意識に赤い立方体と青い三角柱が現前しているとしよう。もしこの主体が二つの対象をそれぞれ別個の対象として見るのでできているなら、彼女は、〈赤い〉や〈立方体である〉という性質が一個の対象に属し、また〈青い〉や〈三角柱である〉という性質が別の対象に属しているということを把握できているはずである。このように、知覚的な対象認識は性質を対象に帰属することに支えられていると考えられるわけだが、では、こうした性質帰属——〔「知覚的な意識に」現前する〔ある〕対象の諸々のあり方を、その対象についての気づきへと統合する (unify)〕(ibid., 中括弧は引用者) こと——を可能にしているのはなんなのか。これがマクダウェルの問いであり、その答えが概念能力なのである。

では、概念能力は具体的にどのようにマクダウェルが課す役割を果たすのか。ここで、概念能力の行使の典型例である判断を考えてみよう。目の前に見えるものについて〈あれは赤い立方体だ〉と判断するとき、主体は、「あれ」によって指示されているものを赤や立方体といった概念に包摂することで、それを関連する性質を備えた一個の対象として認識している。言いかえらるなら、〈かくかくはしかじかだ〉という形式の判断には、対象とその性質との結びつきについての判断者の把握が本質的に含まれているのである。マクダウェルの考えは、こうした特徴をもつ判断を知覚的な対象認識のモデルとみなすべきだ、というものであるように思われる。つまり彼の概念説によれば、主体が赤い立方体をそういうものとして見ることができるのは、そこで上述の判断に類するものが (もちろん能動的・意図的にではないが) なされているからなのである (e.g. McDowell 2008, 2018)。

以上、急ぎ足ながらマクダウェルの概念説について私なりに解説した。もし私の解釈が大筋で正しいとしたら、概念説が選言説を補完するものであることは、いまや明らかなのではないだろうか。私はこれまで、知覚経験と外界のあり方との不可分な結びつきという考えのみを鍵に、選言説を解説してきた。しかしながら、そうした結びつきがあるというだけでは、どうして私が自分の知覚的意識に現前しているものを一個の対象としてとり出したり、それについてなにごとかを信じたり知ったりできるのかは、十分には説明されないの

5. 選言説の意義を評価する

以上四節にわたり、錯覚論法や選言説にまつわるマクダウェルの思索を追ってきた。それをふまえて本稿の最後に問いたいのは、結局のところ彼の選言説はどの程度有意義なのかということだ。

こうした問いは、彼の選言説が専守防衛的な性格をもつことを思い出すとき、とりわけ逼迫したものとなるように思われる。このように消極的な立場である選言説が、それでも知的に尊重されるべきものとして認められるためには、それが解消するとされる問題は真に手強いものだという理解が浸透している必要があるだろう。しかしマクダウェルにとっては都合が悪いことに、知覚の哲学に携わるすべての論者が共通要素を問題含みなものと捉えているわけではない。とりわけ、共通要素の存在を積極的に認める志向説論者は、3節で見た二つの問題を解決するための方策を有しているようにささみえる。

そこで本節では、志向説の立場から二つの問題をうまく解決できそうかを検討する、というかたちで議論を進めていきたい。といっても、志向説の論駁などということ企てているわけではない。私の目標はあくまでも、志向説では救えないように思われる直観の存在を指摘することで、選言説にある洞察を際立たせることである。

5.1 志向説論者は認識論的な問題をうまく解決できそうか

まずは認識論的な問題から検討していこう。確認しておけば、それは〈知覚経験を共通要素とみなすなら、そこから知識へと至るルートが問題含みなものになってしまう〉というものだった。こうしたマクダウェルの問題意識の根底にあるのは、認識的保証についての内在主義（とでも呼ぶべき考え）だろう。つまり彼は、知覚信念を知識たらしめるのに十分な根拠（保証）¹¹へと意識的にアクセスできていることを知識の要件とする（内在主義）わけである¹²。

だ。繰り返しになるが、マクダウェルによれば、そうした状況を打開するためには、概念能力の経験にたいする関与を認める必要があるのである。（ただし以下では、こうした概念説にまつわる問題はすべて脇に置くこととする。）

¹¹ 保証という概念についてのこうした理解は、Comesaña 2005 に負うものである。

¹² やや横道に逸れるが一点注意しておこう。ここで内在

それにたいする志向説側からの応答としては、たとえば小草泰のもの（小草 2009）をあげることができる。彼は、保証についての内在主義から選言説へと進むマクダウェルにたいして次の二点を指摘する。すなわち、志向説論者は保証にかんして外在主義をとってもいいということ、そして（私としてはこちらがとりわけ斬新で興味深いと思うのだが）志向説論者であっても内在主義をとる余地があるということである。

まず外在主義をとるという選択肢についてだが、これはつまり、内在主義から（多かれ少なかれ）距離をとり、主体の意識の外にある要素——典型的には、判断や信念が形成される過程の信頼性——に訴えていくということだ。それゆえマクダウェルの問題意識には真つ向から反対することになるのだが、小草は、「少なくとも認識論的外在主義が広く支持者をもっており、可能な選択肢であると主張することはできる」（ibid., p. 38）と述べてそれを擁護する。

もう一つの内在主義をとるという選択肢は、「対象依存的な現象的性格を持ち出さなくても、主体は、自分が「見ている」というような事実含意的な状態にあることにアクセスできる」（ibid., p. 39, 強調は原著者）という考えに支えられている。内在主義が課す制約を満たすような仕方ではPという信念に保証を与えるためには、主体は、自分はPということを見ているという阻却不可能な自己知をもっていなければならない。だが主体がこの種の自己知をもつ可能性については、「問題の経験が「Pであるように見える」という性格のものであることを識別する能力と、そして問題の経験に際して成立しているその他のいくつかの条件に対して敏感であること（例えば、どういう状況において、「私は～を見ている」と判断するのを控えるべきかを知っていること）」（ibid., pp. 39–40）という、志向説論者に利用可能なりソースだけからでも説明がつくのでは

主義として述べなおしたように、マクダウェルは主体が知覚的な根拠に意識的にアクセスできることの必要性を説く。しかし、このことを理由に、〈知覚信念を形成するさい、私たちはいつも根拠を前提として信念を結論とする推論的な手続きをふんでいるのだ〉という過度に反省的な人間観を彼に押しつけるのは性急である。彼自身もこうしたイメージを払拭しようと努めているが、ポイントは、「理性は客観的实在の諸側面が主体に知覚的に現前するさいにはたらいっている」（McDowell 2010, p. 247）ということだ。つまりマクダウェルの考えでは、主体が知覚経験をもつということは、（ことがうまく運んでいる場合には）それ自体が知覚的な根拠に基づいて信念を形成することなのである。

ないか、というわけである。

小草は、これら二つの選択肢を決定的なものとは考えていない。それでもこうした可能性の存在は、認識論的な文脈における選言説の価値をたしかに脅かしているものである。とはいえ、可能性は検討されねばならない。そして私は、小草のあげる選択肢には受け入れがたいところがあると考えている。そこで以下では、それぞれの選択肢にたいして一点ずつ私の疑念を提起してみたい。

まず外在主義をとるという選択肢にたいしては、単刀直入に、それは（ただ可能であるだけでなく）本当に魅力的なのかと問うことができるだろう¹³。もちろん、小草も言うとおり、「外在主義を採るからといって、主体が〔……〕自分自身の知識に対する理由や根拠を示せなくてもかまわないということが直ちに帰結するわけではない」（*ibid.*, p. 38, 中括弧は引用者）。言いかえるなら、保証の域には達しないにせよ、主体は意識的にアクセスしうる要素に訴えて自分の信念を正当化できる必要もある、とする「ハイブリッドな」（McDowell 1995, p. 400）外在主義を考えることは、十分に可能である。そしてこのように理解された外在主義は、内在主義的な直観を尊重しつつその不足を補うものとして、なるほどかなり魅力的な提案であるようにもみえる。

しかしここで注意すべきは、ハイブリッドな外在主義は、知覚的な根拠は阻却可能なものでしかありえないという考え——そもそもこれが問題の発端だった——を撤回してくれるようなものではない、ということだ。たしかにこの立場を受け入れるなら、外在主義的な要件が主体と外界とのあいだに成立していることを確認できる誰かがその主体に知識を帰属させる、といったことは可能になるのかもしれない。だが、ここでも主体が意識的にアクセスしうる根拠は阻却可能なものでしかないとされている以上、主体の一人称的観点から見られた知識の身分は依然として救われていないのである。これは、主体が意識的にアクセスできる範囲内に保証の場を確保しようとする選言説との根本的な違いだろう。

上で私は、ハイブリッドな外在主義にそれなりの魅

力が感じられることを認めた。しかしマクダウェルの見立てでは、こうした魅力は、この立場がそれ自体として有しているものではなく、共通要素をたてる見方が設定する次のような枠組みによって外的に付与されたものなのだという。すなわち、この立場の他には、いっさいの知識を放棄する懐疑論か、正当化の役割をまったく認めない過激な外在主義しか残されていない、という選択の枠組みである（McDowell 1995）。私もこの見立てに同意する。選言説によってこの枠組みそのものと手を切り、主体の一人称的観点から見られた知識の身分を回復させる可能性に気づくなら、ハイブリッドな外在主義の相対的な魅力は一段落ちこむことになるのではないだろうか。

さて、次に内在主義をとるという選択肢についてだが、これにたいして私が問いたいのは、小草の考える説明が本当に内在主義の路線に沿ったものになっているのかである。この点について検討するため、彼が提示している具体的な説明案を見てみよう。

主体は、実際に正しい知覚経験をもってきた過程で、「～を見る」という概念がどんなものであり、そしてそれをいつ自分に帰属させるべきなのかその条件について学習し、自分に〈Pであることを見ている〉という性質が帰属されるかどうかを直接に告げる能力を獲得する。そして、適切な場面でこの能力を行使することによって、「私はPであることを見ている」と直接に知ることができる（小草 2009, p. 39）。

小草によれば、知覚経験が付与する（志向説論者からすれば）阻却可能な根拠から、自分はPということを見ているという阻却不可能な自己知への移行は、学習によって培われた能力に支えられるのだという。すると気になるのは、ここで言われている能力が具体的にどのようなものなのかということだ。

まず、「直接に」という言葉を見るかぎり、それは反省的・推論的なもの——すなわち、知覚経験から得た阻却可能な根拠を状況や文脈などについての情報と統合し、阻却不可能な状態に仕立てあげる思考プロセスのようなもの——ではないのかもしれない。実際、ここでこの種の能力を要請するのは控えるべきだろう。知覚的な根拠の阻却可能性を受け入れるという方針を徹底するなら、主体は自分が置かれた状況や文脈についても阻却可能な情報しか得られないのだと考えねばならない。というのは、そうした情報もま

¹³ 以下の議論は、外在主義を総じて否定しようとするものではない。認識論という分野に属する主題のなかには、当然ながら、外在主義的な発想が有効であったり不可欠でさえあったりするようなものも存在する（cf. Kitcher 1992）。ここで私が問題にしようとしているのは、あくまでも、知覚の認識論において外在主義をとることが魅力的なのかである。

た知覚によって獲得されるべきものだからである。しかし阻却可能なものの集積から阻却不可能なものは導出できない以上、目下検討している方針は問題解決に資さないと云わざるをえない。

そこで私なりに推測すると、問題の能力は知覚経験をもとに自己知を形成するさいの信頼性だということになりそうである。だがもしこうした推測が正しいなら、小草の説明を内在主義のものとみなすことはできない。というのは、(上でもふれたように) 信頼性というのは典型的な外在主義の持ち物だからだ。実際、それ自体としては阻却可能な知覚的根拠を主体の能力に訴えて阻却不可能な自己知へと繋げようとする小草のアイデアには、先に見たハイブリッドな外在主義を思わせるところがある。前者が後者と比べていかなる点で内在主義的なものがもう少し明確にされないかぎり、志向説論者にも内在主義をとることができるという彼の主張には、内実が伴わないのではないだろうか。

以上論じてきたように、小草が提案する二つの選択肢にはまだ疑念の余地があるように思われる。要点だけ繰り返しておけば、志向説論者が保証についての内在主義をとるのはやはり容易ではなさそうにみえるし、代案である外在主義はいまひとつ魅力に欠けているのである。そしてこうした疑念の余地がある以上、選言説をとることには認識論的な観点から見て十分な動機があると言えるだろう。

5.2 志向説論者は超越論的な問題をうまく解決できそうか

それでは超越論的な問題の検討に移ろう。確認しておけば、それはく知覚経験を共通要素とみなすなら、その真正性条件を一意に定めるための手掛かりを経験の内部に見出すことができなくなり、結果として経験が志向性をもつという考えが理解できなくなってしまうというものだった。

知覚の哲学、あるいはもう少し広く言語哲学や心の哲学の歴史を振り返ってみると、この問題——とりわけ、志向性が内的なものにスーパーヴィーンすることは——はないという論点——は、(残念ながら) マクダウェルではなく H. パトナム (Putnam 1975) や T. バージ (Burge 1979) の議論を契機として、広く認識されてきたと言える¹⁴。そしてそうしたなかで志向説論者が出てきたのが、知覚経験と外界とのあいだに成立し

ている因果的な事実に着目するという方針、すなわち意味論的外在主義だ。経験だけでは力不足だというのなら、その外部にあるものに訴えればいいではないか、というわけである¹⁵。

しかしもちろん、ただ内外の因果的な繋がりを指摘しただけで問題があっさり解決するわけではない。3 節 2 項でも関連するマクダウェルの一節を引用したが、問題の核心は真正性条件という概念がもつ規範的な性格にある。つまり、意味論的外在主義が成功するためには、規範性の因果性への還元という大工事を首尾よく遂行してみせねばならないのである。

現在の議論状況を見るかぎり、そうした試みのなかでもっとも有望視されているものの一つが、R. ミリカンの目的論的意味論 (teleosemantics) だろう (cf. Millikan 1990a; 前田 2004; 戸田山 2014)。彼女の試みの基本的なアイデアは、(その名称が示唆するとおり) 自然選択に訴えて因果の領域に目的論的観点を導入するというものだ。そうすることで、内的状態としての知覚経験にも、規範的な性格を備えた「本来の機能 (proper function)」——すなわち、経験がそれを遂行する「ためにデザインされている」ところの機能、あるいは経験が遂行する「ことになっている」機能——の存在を認められるようになる、と彼女は考えるのである (Millikan 1984, p. 17)。

ミリカンの試み、とくに本来の機能にかんする彼女の見解を、もう少し具体的に検討していこう。といっても、この概念に彼女自身が与えている定義は他の専門的な概念を前提するため少々複雑であり、本項でそのまま扱うのは難しい¹⁶。幸いなことに、戸田山和久

持するようになる (Putnam 1999)。註 4 で私は、選言説の超越論的な意義があまり注目されていないことを指摘したが、パトナムは数少ない例外の一人だと私は考えている。

¹⁵ この意味論的外在主義は、前項で扱った保証についての外在主義とは別物である。両者の違いを視覚的にも際立たせるため、本項で意味論的外在主義を名指すさいには、「意味論的」という形容を省略しないこととする。

¹⁶ ここで私が詳細なとり扱いを避けようとしている概念は、「複製によって確立された (reproductively established) ファミリー」と「複製によって確立された特徴」の二つだ (Millikan 1984, p. 28)。これらの名称が示唆するように、ミリカンの考えでは、なにかに特定の本来の機能が備わるためには、その基盤となるものが複製によって継承されたり増殖したりしていく過程が不可欠である。この点については、ごく簡単にではあるが以下の論述に反映させている。

¹⁴ ちなみに、このようにセンセーショナルな論文を著したパトナムは、後にマクダウェルを称えて選言説を支

が本質的な部分を簡潔に抽出してくれているので、ここではそちらに依拠して議論を進めたい。

〔主体〕S がもつアイテム A が B という本来の機能をもつ ⇔ S に A が存在しているのは、S の先祖において A が B という効果を果たしてきたことが、生存上の有利さを先祖たちにもたらししてきたことの結果である（戸田山 2014, pp. 85–86, 中括弧は引用者）。

たとえば、私たちの先祖にあたるある動物にとって、飲用水を確保することが生存上の重要課題だったのだとしよう。このとき、もしその動物にしばしば生じる内的状態 W と、その動物の目の前に水があることとのあいだに規則的な対応関係があったなら、そしてもしその動物が W を利用することでうまく水にありつけていたなら、W はその動物の生存にとって有利にはたっていたと言えるだろう。ここでさらに、W を生み出す生理学的な基盤がその利点のために複製されていき、私たちにも受け継がれている（それゆえ、私たちにもしばしば W が生じる）のだとしてみよう。ミリカンの定義が指定しているのは、おおむねこのような状況だ。彼女の考えによれば、私たちに生じる W は、生存上の利点という観点から記述される上述の来歴の存在によって、主体の目の前に水があることを示すという本来の機能を獲得するのである¹⁷。

以上概観した本来の機能という道具立てを用いるなら、志向説の立場から超越論的な問題にアプローチすることも、たしかに不可能ではなくなるように思われる。というのはこのとき、内的状態としての知覚経験についても、それが真正なのか否かを、その経験が歴史的に継承した本来の機能に適っているか否かという観点から評価できるようになるからだ。たとえば先の W が知覚経験だったとしたら、この経験は、主体の目の前に実際に水がある場面で生じたときには本来の機能を果たしていることになるし、そうでない場面で生じたときには誤作動を起こしていることになる。そしてそうだとすれば、前者の場面をこの経験の真正性条

件とみなす——そしてそれゆえ、この経験を水についてのものとみなす——というのも、そう不自然なことではないだろう。このようにミリカンの目的論的意味論は、知覚経験の真正性条件を本来の機能が果たされる条件と捉え、そして本来の機能を自然選択の観点から理解することで、内外の因果的な繋がりの中に規範的な関係性を見出そうとするのである¹⁸。

しかしながら、こうした解決策が本当に満足のいくものなのかにかんしては、検討の余地があるように思われる。そう言うさいに私が抱いている疑念は、（前項でも問題になったが）意識ないし一人称的観点にまつわるものだ。つまり、ミリカンの高度に歴史主義的な解決策には、（マクダウェルの言葉を借りれば）「内観では外部の環境 [……] にアクセスできない」（McDowell 1986, p. 250, 中括弧は引用者）という反直観的な帰結が伴うように思われるのである。この点をはっきりと例証するものとして、ミリカン自身の一節を引用しよう。

経験することそれ自体は知ることではない。経験することは、経験されるものを知ることでもなければ、自分の経験の本性を知ることでもない。意識は根本的に非認識的（nonepistemic）である。について性（Ofness）や志向性は、志向されたり知られたりする対象すべてがそうであると同様、つねにその一部が意識の外部にある。私がなにかに気づいたり、なにかを知ったりするためには、私が気づいたり知ったりするなにかがそこに存在せねばならない。しかし、私が気づいたり知ったりするなにかがそこに存在するということや、気づきや知識の対象であるところのものは、単純に意識の中にあるようなものではない。意識には志向性も知識も含まれないのである（Millikan 1990b, pp. 207–208, 強調は原著者）。

こうした帰結が出てくる理由については、比較的容易に説明がつく。ポイントはずばり、いみじくもミリカン自身が述べてくれているように、自然選択という歴史的過程は「完全に心や意識の外部にある」（Millikan 1984, p. 90）ということだ。繰り返しになるが、

¹⁷ この最後の点が如実に表れているのは、スワンブマンにたいするミリカンの姿勢だろう。スワンブマンとは、D. デイヴィッドソンが考案した思考実験用のキャラクターで、沼に落ちた雷によって偶然生み出された非常に精巧な人間の物理的複製のことなのだが（Davidson 1987）、ミリカンは、このように来歴を欠いたスワンブマン（や、その器官）には本来の機能をいっさい認めないのである（e.g. Millikan 1984, 1989）。

¹⁸ もちろん、そもそもミリカンの試みが志向性の説明に成功しているのかを疑問視する声もあるのだが、私の目下の関心や守備範囲から外れるため、この点についてここで詳論することはできない。その代わりに、私が知るかぎりでの批判として、Putnam 1992、Thornton 1998、そして前田 2004 をあげておきたい。

知覚の場面で主体が意識的にアクセスできるのは知覚経験の射程内までである。そして当然ながら、彼女が念頭に置いているような来歴が経験の射程内に収まるはずはない。だがそうだとすると、彼女の解決策は、主体の一人称的観点についてはなんら事態を改善していないことになるだろう。彼女の解決策に志向性という「光が差しこむのは、言うなれば、私たちが視野を広げ、たんなる内的領域のレイアウト以上のものを考慮に入れる場合にかざられる」(McDowell 1986, p. 250)。逆から言えば、超越論的な問題を「完全に心や意識の外部にある」ものに訴えて解決しようとするかぎり、「意識は根本的に非認識的」なままになってしまうのである¹⁹。

他方、選言説がもたらす志向性観はこれとはまったく別であると考えられる。4節で論じたように、この立場のもとでは、ある種の知覚経験が生じるさいにしばしば特定の外界のあり方が私たちの意識に現前する、ということによって、その経験の真正性条件を申し分なく定めることができる。そしてそうだとしたら、私たちは、自分の意識に現れるまさにその光景を、問題の外界のあり方についてのものとして——つまり、実際にそれが現前しているか否かに応じて、私たちに真実を語っていたり私たちを欺いていたたりするものとして——理解できることになるだろう。このように選言説は、知覚経験の志向性を私たちが意識的にアクセスできる範囲内に収めることで、私たちの一人称的観点が「外界を見晴らす視点」(ibid., p. 241)であることを保証してくれるのである。

とはいえ、ミリカン自身は上述のような状況を問題だと考えてはいない。むしろ彼女は、(知覚経験を含む)心的状態の志向性を一人称的観点から手軽に把握できるという「意味についての合理主義 (Meaning Rationalism)」こそ、「私たちの哲学的本能や伝統的でなじみ深いすべての議論に浸透している古色蒼然としたドグマ」であり、「私たちが進んで放棄せねばならない」ものののだ、という方向に論を展開している (Millikan 1984, p. 10)²⁰。

外界への一人称的アクセスの可能性を守ろうとするマクダウェルと、そんなものは諦めるべきだとするミリカン——このように整理してみたとき、果たしてこの対立が議論によって合理的に決着がつくものなのかについて、疑問が湧いてこないではない (ひょっとすると、それは究極的には哲学的な信条の問題に行き着くものなのかもしれない)。しかしながら、この点にかんしてもう一步だけマクダウェル側を後押しすることはできる、と私は考えている。私が知るかぎり、彼自身は「経験は「外界を見晴らす視点」である」という主張について、直観に訴える以上のことをしていないのだが、J. サールの著作に興味深い援護射撃を見出すことができるのである。

サールの議論を確認するため、ミリカンが言うように、私は自分の知覚経験の志向性について内観によって知ることはできないのだと想定しよう。そしてさらに、私以外の誰か (A と呼ぼう) が、(私自身は意識的にアクセスできない) 外的要因を考慮に入れつつ、私の経験の内容を特定しようとしているとも想定しよう。さて、サールが問題にするのは、A が首尾よくこの作業を遂行できるのかどうかだ。そして彼はできないと考える。まず、A は私やあなたと同じく、自身の一人称的な観点から物事を把握する一人の人間である——けっして「神の視点」の類に立つような存在者ではない。すると彼女は、上述の作業に従事するさい、私と周囲の環境との相互作用を見たり、それについて考えをめぐらせたりするなかで彼女の意識に与えられたもの・彼女が意識的に把握できていることに、決定的に依拠せねばならないだろう。しかしミリカンの考えを真剣に受けとるなら、A の意識もまた、私のそれと同様、彼女の経験や思考がなにについてのものなのかを彼女に教えるようなものではない。つまり、私の経験

外れることかもしれない。というのは、「意味についての」という形容が示唆するとおり、この種の合理主義を批判するさいに彼女は、言語の意味や思考の内容を主題とした議論に多くのページを割いているからである (Millikan 1984, 1993b)。

ただし彼女は、知覚経験を念頭に置きつつ、「意識は、それが意味をもつということとそれが意味するものの両方について、自前で供述書 (affidavit) を提供する」(Millikan 1984, p. 325, 強調は原著者) と批判的な調子で述べてもいる。このことに鑑みると、本項でマクダウェルの観点から展開している疑念もまた、彼女の目には意味についての合理主義の表れと映るのではないだろうか。(いずれにせよ、この点にかんする私の解釈の正否は、本項の議論に実質的な影響を与えるものではない。)

¹⁹ この段落ではミリカンの解決策に焦点を絞っているが、途中で引用した Millikan 1984 や McDowell 1986 からの一節は、いずれも意味論的外在主義全般を対象にしたものである。私としても、ここで行った説明は、必要な変更を加えることで、意味論的外在主義に広く適用できるようになると考えている。

²⁰ 厳密に言えば、意味についての合理主義を知覚経験に関係するものとして扱うことは、ミリカンの意図から

の内容を特定するはずの A の心的状態の内容が、話のこの段階ではまだちゃんと特定されていないのである。そうだとすれば、A に私の置かれた状況の改善を託すことは、問題を一つ先送りにすることでしかないのではないか (Searle 1983, p. 230, ただし文脈に合わせて若干の変更を施した)²¹。サルはこの議論を要約して次のように述べる。「たとえ一群の外在主義的な意味論的概念があるとしても、それは内在主義的な概念に寄生するものであり、またそこへとすっかり還元できるのでなければならないだろう」(ibid. [邦訳: p. 319])。意味論的外在主義の方針のもと特定される志向性ないし内容は、少なくともどこかで誰かが意識的に把握できるものであるはずなのだ。

私見では、以上のサールの議論は、意識を総じて非認識的なものとするミリカンの決然とした態度にたいして、重要な整合性の問題を突きつけている。ただし私は、サールの立場それ自体は問題含みな側面をもっているとも考えている。「私たちが自分自身にたいして世界を表象するためにもち合わせているのは脳だけであり、私たちが使用できるものはすべて脳の内部になければならない」(ibid. [邦訳: p. 319]) と力説するように、彼は知覚経験の志向性を、脳の生理学的特性のみによって解明できるものと考えた。マクダウェルの用語を使って言いかえるなら、サルはデカルト的な描像にコミットしつつ、しかも経験が本来的に志向性をもつと考えているのである (cf. Searle 1992)。しかし本項冒頭でもふれたように、ミリカンら意味論的外在主義者にとって、これはとうてい受け入れられない考えである。実際、彼女はある箇所で、「私には、目下の文脈における「べき」「つまり、志向性に備わる規範性」を〔主体内部に〕今ある構造や傾向性を参照してひも解く方法が分からない」(Millikan 1984, p. 94, 中括弧は引用者)と書いている。この困惑に十分な根拠があることについては、3 節 2 項で (マクダウェルの観点からではあるが) すでに論じたので、ここで繰り返す必要はないだろう。

このように、ミリカンとサルという二者を直接比較するかぎり、どちらも相手にたいする有効な批判を有しており、決着をつけることが難しい。しかしここでマクダウェルの選言説の可能性を思い出すなら、事

態は違って見えてくるように思われる。

本稿のこれまでの議論から明らかなように、マクダウェルは、志向性が内的なものにスーパーヴィーンすることはしないとする点では、ミリカンと軌を一にしている。しかし同時に、彼は、志向性を説明する外的要因を主体が意識的にアクセス可能な範囲内に収めることで、サールの言う意味での「内在主義」を実現しようとしている²²。つまりマクダウェルの選言説は、ミリカンとサールの弱点の両方を克服できていると言えるのである。さて——ここでマクダウェルとミリカンの比較に話を戻すとして——もしこうした「いいことどり」の可能性が残されているのだとしたら、どうしてわざわざサールの批判が待ち受ける方向に進まねばならないのか。マクダウェルとともに選言説をとる論者には、少なくとも、このような仕方ではミリカンの見解の魅力を削ぐことが可能だろう。これが私の考えるマクダウェルの「後押し」である。

6. 結論

本稿では、錯覚論法や選言説をめぐるマクダウェルの思索の解明および評価を試みてきた。一連の議論のなかで述べてきたことのうち、結論としてここで繰り返しておきたいのは次の三点。すなわち、(1) マクダウェルが問題視する共通要素をたてる見方とは、知覚経験を一様に外界から切り離して主体内部に位置づけようとする考えだということ、(2) そうした考えに対抗する彼の選言説は、真正な知覚経験を対象の現前として理解するよう説くものということ、そして (3) 彼が指摘する二つの問題はいずれも、志向説という代案によってそうすなりと (つまり、なんの対価を支払うこともなく) 解決できるものではなく、それゆえ選言説には大きな意義があるということ、これらである。

最後に、本稿の成果が与える示唆についてもごく簡単に述べておきたい。5 節の議論が示していたように、マクダウェルの選言説は、意識ないし一人称的観点を

²¹ 言うまでもなく、A の心的状態の志向性を特定すべく、彼女を傍から観察するさらなる誰かを導入しても、それはまったく助けにならない。これは明らかに悪しき無限背進である。

²² 正確を期すなら、マクダウェル自身はサールの内在主義という呼称にたいして慎重な態度をとっている。なぜなら、マクダウェルが指摘するように、サルはそれを志向性の脳内在主義と結びつけているからだ。しかし、彼の内在主義は同時に志向性の意識内在主義でもある。そしてこの側面に注目するなら、それはまさしくマクダウェルが手にしようとしているものである (McDowell 1991)。私が本文中でとりあげたのも、こう理解されたサールの内在主義である。

豊かなものにしようとする姿勢と相性がよい。それゆえ、選言説の是非をめぐるなされる今後の検討は、この姿勢の是非についての検討と関連づけてなされるのが有益であると考えられる。

参考文献

- Burge, T., 1979, “Individualism and the Mental,” rep. in his 2007, *Foundations of Mind*, Oxford, Clarendon Press, pp. 100–150. [邦訳：前田高弘, 2004「個体主義と心的なもの」信原幸弘編『シリーズ心の哲学 III：翻訳篇』所収, 勁草書房, pp. 163–274.]
- Byrne, A., and Logue, H., 2008, “Either/Or,” in Haddock and Macpherson, 2008a, pp. 57–94.
- Comesaña, J., 2005, “Justified vs. Warranted Perceptual Belief: Resisting Disjunctivism,” in *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. LXXI, pp. 367–383.
- Davidson, D., 1987, “Knowing One’s Own Mind,” rep. in his 2001, *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford, New York, Clarendon Press, pp. 15–38. [邦訳：清塚邦彦他, 2007「自分自身の心を知ること」『主観的、間主観的、客観的』所収, 春秋社, pp. 35–71.]
- De Gaynesford, M., 2004, *John McDowell*, Cambridge, Polity.
- Fish, William, 2010, *Philosophy of Perception*, New York, Routledge. [邦訳：山田圭一他, 2014『知覚の哲学入門』勁草書房.]
- Fodor, J., 1987, *Psychosemantics*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Haddock, A. and Macpherson, F. (eds.), 2008a, *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, Oxford, Oxford University Press.
- , 2008b, “Introduction: Varieties of Disjunctivism,” in Haddock and Macpherson 2008a, pp. 1–24.
- Kitcher, P., 1992, “The Naturalists Return,” in *Philosophical Review*, vol. 101, pp. 53–114.
- Kripke, S., 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language: An Elementary Exposition*, Cambridge, Mass., Harvard University Press. [邦訳：黒崎宏, 1983『ウィットゲンシュタインのパラドックス：規則・私的言語・他人の心』産業図書.]
- McDowell, J., 1982, “Criteria, Defeasibility, and Knowledge,” rep. in McDowell 1998, pp. 369–394.
- , 1986, “Singular Thought and the Extent of Inner Space,” rep. in McDowell 1998, pp. 228–259.
- , 1991, “Intentionality *De Re*,” rep. in McDowell 1998, pp. 260–274.
- , 1994, *Mind and World*, second edition in 1996, Harvard University Press. [邦訳：神崎繁他, 2010『心と世界』勁草書房.]
- , 1995, “Knowledge and the Internal,” rep. in McDowell 1998b, pp. 393–413.
- , 1998, *Meaning, Knowledge, and Reality*, Cambridge, Mass., Harvard University Press.
- , 2008, “Avoiding the Myth of the Given,” in J. Lindgaard (ed.), *John McDowell: Experience, Norm, and Nature*, Malden, Mass., Blackwell, pp. 1–14.
- , 2010, “Tyler Burge on Disjunctivism,” in *Philosophical Explorations*, vol. 13, pp. 243–255.
- , 2013a, “Perceptual Experience: Both Relational and Contentful,” in *European Journal of Philosophy*, vol. 21, pp. 144–157.
- , 2013b, “Tyler Burge on Disjunctivism (II),” in *Philosophical Explorations*, vol. 16, pp. 259–279.
- , 2018, “Travis on Frege, Kant, and the Given: Comments on ‘Unlocking the Outer World,’” in J. Gersel, R. T. Jensen, M. S. Thaning, and S. Overgaard (eds.), *In the Light of Experience: New Essays on Perception and Reasons*, Oxford, U. K., Oxford University Press, pp. 23–35.
- Millikan, R., 1984, *Language, Thought, and Other Biological Categories*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- , 1989, “In Defense of Proper Function,” rep. in Millikan 1993a, pp. 13–29.
- , 1990a, “Compare and Contrast Dretske, Fodor, and Millikan on Teleosemantics,” rep. in Millikan 1993a, pp. 123–133.
- , 1990b, “Metaphysical Antirealism?,” rep. in Millikan 1993a, pp. 193–210.
- , 1993a, *White Queen Psychology and Other Essays for Alice*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- , 1993b, “White Queen Psychology; or, The Last Myth of the Given,” in Millikan 1993a, pp. 279–363.
- Price, H. H., 1932, *Perception*, rep. in 1954, London, Methuen.
- Pritchard, Duncan, 2012, *Epistemological Disjunctivism*, Oxford, Oxford University Press.
- Putnam, H., 1975, “The Meaning of ‘Meaning,’” in K. Gunderson, *Language, Mind and Knowledge*, vol. 2, pp. 131–193, Minneapolis, University of Minnesota Press.
- , 1992, *Renewing Philosophy*, Cambridge, Mass.,

- Harvard University Press.
- , 1999, *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*, New York, Columbia University Press. [邦訳：野本和幸他, 2005 『心・身体・世界：三つ摺りの綱／自然な実在論』法政大学出版局.]
- Searle, J., 1983, *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge, Cambridge University Press. [邦訳：坂本百大他, 1997 『志向性：心の哲学』誠信書房.]
- , 1992, *The Rediscovery of the Mind*, Cambridge, Mass., MIT Press. [邦訳：宮原勇, 2008 『ディスカバー・マインド！：哲学の挑戦』筑摩書房.]
- Snowdon, P., 2005, “The Formulation of Disjunctivism: A Response to Fish,” in *Proceedings of the Aristotelian Society*, vol. 105, pp. 129–141.
- Soteriou, M., 2016, *Disjunctivism*, New York, Routledge.
- Thornton, T., 1998, *Wittgenstein on Language and Thought: The Philosophy of Content*, Edinburgh, Edinburgh University Press.
- , 2004, *John McDowell*, Chesham, Acumen.
- Wittgenstein, L., 1953, *Philosophical Investigations*, forth edition in 2009, Chichester, Wiley-Blackwell. [邦訳：藤本隆志, 1976 『ウィットゲンシュタイン全集 8』大修館書店.]
- Wright, C., 2002, “(Anti-)Sceptic Simple and Subtle: G. E. Moore and John McDowell,” in *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. LXV, pp. 330–348.
- 小草泰, 2009 「知覚の志向説と選言説」日本科学哲学会編『科学哲学』第 42 号所収, pp. 29–49.
- 篠原成彦, 1995 「マクダウェルを読む—「単称思想と内的空間の広がり」, そのヴィジョン」『現代思想』第 23 号所収, 青土社, pp. 340–51.
- 戸田山和久, 2014 『哲学入門』ちくま新書.
- 前田高弘, 2004 「志向性と目的論的機能主義」信原幸弘編『シリーズ心の哲 I: 人間篇』所収, 勁草書房, pp. 85–129.

なお、引用した英文はすべて私の責任で訳したが、邦訳を併記したものにかんしてはそれを大いに参考にさせていただいた。

(2018 年 10 月 22 日投稿、2019 年 10 月 23 日再投稿、2020 年 2 月 8 日掲載決定)